

『ピウカに住んだドイツ人』のその後

元ドイツ館長 田村 一郎

4年前11月の本紙「第16号」に、このタイトルで「紹介とお願い」を書いたことがある。『徳島新聞』でも取り上げてくれたので、ご記憶の方もあるかと思う。ドイツ館に、札幌の松浦光二さんから48ページほどの表記の印刷物が送られてきた。「ピウカ」とは、北海道中央の旭川から北100キロほどにある「美深」のアイヌ名である。ここに徳島・板東で俘虜生活を送った「ユリウス・クランツ」という人が、解放後小樽にあったゲルトネル商会支社の一員として、ドイツ人の若妻とこの地に住んでいたというのである。

この会社が手がけていたのは「銘木」で、ことに北欧からの良質のナラ材は棺桶などの素材として珍重されていた。そうした材木が手に入りにくくなってきたので、同じく寒暖の差の激しい北海道の森林に目をつけ輸入を図っていたらしい。もちろん、この人が徳島にいたことはすぐに名簿で確認できた。問題はそれに付随した「お願い」の方で、このクランツが結婚前に小樽で日本人女性と付き合っていて男の子もいたというのである。クランツの娘のエルケという人が亡くなる寸前の母からこのことを聞き、人間としてクリスチャンとして深く傷つき、たまたま文通のあった松浦さんに、お詫びをしたいのでその名も知らぬ「異母兄」のことを調べてほしいと頼んできたのである。北海道ならともかく、俘虜として5年間を過ごしただけの徳島で手がかりがあるはずもなかったが、藁をもつかむ思いで公開したのが上記の本紙と新聞の記事である。

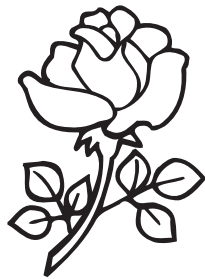
3年前に小樽に帰り、あらためて松浦さんともお会いし、知人が小樽商大同窓会誌の『緑丘』や三井物産の「北海道OB会会報」にこの訴えを紹介してくれたことをお聞きした。

この奥村さんという方はドイツ館にも関心をもち鳴門にも来られたし、その同僚の釜沢さんもこのことに興味をもち、得意のドイツ語で先方とのコンタクトを深めてくださったそうである。先日札幌に来られた釜沢さんにお会いしたが、クランツが北海道に来たのは小樽から応召したバルクホールンという人の誘いによるらしいと聞いて驚いた。板東での演劇活動の一つの中心になったのは第三海兵大隊(Ⅲ.S.B.)の第6中隊であるが、バルクホールンはその演出者の一人で、シラーの『群盗』やレッシングの『ミンナ・フォン・バルクヘルム』などの本格劇を手がけている。そのほか体操会の一グループの指導もしており、日本の習慣を紹介した『国民年中行事』の訳者の一人でもある。まさに八^{はち}面六^{むんろっぴ}臂の活躍をした重要人物の一人なのだが、この人がもともと小樽のゲルトネル商会で働いていて、解放後クランツを伴って来道したということらしい。

それはともかくこうした地固めが実ったのは今年の2月のことで、2人の知人に勇気づけられた松浦さんが故郷近くの『名寄新聞』に協力を求め、その記事に関心を持った『北海道新聞』も取材に訪れた。やはりマスコミの影響力



は大きく、松浦さんの電話には情報が相次いだらしい。そのうちのある婦人の連絡に惹かれ、お話をうかがいAさんの名が浮かんできた。氏名・住所等は明かさないとのことだが、ご本人にお会いしたところの方が小樽の「異母兄」の息子さんであることが明らかになった。実に90年もの歳月を経てのことである。この方と、ドイツ人の叔母エルケさんとの出会いが実現するのかどうかは判らない。少なくとも松浦さんらの労苦が稔り、海と時間を隔てた絆が繋がったことを嬉しく思っている。



前号で1971(昭和46)年に放映のテレビ番組について書きましたが、その番組の中に出てくる元捕虜の方々の名前も書きました。するとこの記事を読んだ方から「板東の桜とクライさん」と題するエッセーが送られてきました。元捕虜と板東との絆を示す感動的なエピソードであり、タイトルの桜からはほど遠い季節になってしまいましたが、著者の承諾を得て、ここに掲載することになります。なお、クライさんはこのテレビ番組放映の前年にライポルトさんと共に板東(現鳴門市大麻町)を訪れ、地元の方々の歓迎を受けています。

板東の桜とクライさん

佐々木 陽一郎

「さまざまなこと思い出す桜かな」という句があるが、桜の花の咲く季節になると、四国徳島県の板東の桜の花を心に思い描くのを常とするようになった。

昭和60年10月、ドイツのリューデンシャイト市で、パウエル・クライと名乗る一人の元ドイツ兵と出会った。彼は板東俘虜収容所に3年有余にわたって収容されていたことが



板東を訪れた時のクライさん(左)とライポルトさん(右)

あり、91歳の高齢とは思えないほど元気で記憶もしっかりしていた。70年も前に写した当時の写真を数枚持参し、懐かしそうに板東俘虜収容所での生活を話してくれた。彼は「日本の板東は第二の故郷である。」と言い、話は尽きることはなかった。持参した写真のほとんどは、長い歳月にさらされて薄茶色に変色していたが、人物を識別するには支障はなく、満開の桜の木を背景に俘虜たちと収容所勤務の日本の軍人（職員）との集合写真もあった。花見をした時に記念に撮影したものとのことだった。

10月のドイツは日暮れも早く、夜の冷気も身に染みてくる。8時には閉会して別れを告げる予定であるが、91歳の元ドイツ兵は帰ろうとしない。日本にもう一度行きたいが高齢となり行くことはできない、日本人と会うのも今夜が最後だ、そんな心境だったに違いない。老人は私の手をがっちり握り、「さくら さくら の歌を歌って欲しい」と言った。その瞬間「一期一会」の思いが一気に噴き出し、国境の壁や民族の違いなどを押し流し、人情に国境がないことをはっきりと悟ることができた。更け行くしじまの中で、

さくら さくら 弥生の空は 見渡す限り

霞か雲か 匂いぞいずる

いざや いざや 見にゆかん

歌っている間、クライさんは頭を少し下げ、じっと目を閉じていた。彼の胸の中に去来していたものは、美しい日本の春、爛漫と咲く板東の桜、そして再び繰り返すことの出来ない収容所での当時20歳台の青春の日々の生活であつたらう。

このことがあってから、春が来るたびに、板東の桜とクライさんを思うようになった。板東の桜は、クライさんが99歳でこの世を去るまで、心の中で咲き続けていたと思う。いつか桜の季節に板東を訪れ、ドイツ兵の慰霊碑の前でさくらさくらを歌う決意でいる。

クライさんたちの集合写真の被写体となっていた桜樹は、高さや枝ぶりからして、相当の巨木のように推察できた。最前列の中央には髭を生やした収容所長と思われる軍服姿の軍人が座り、その左右にも職員たちが席を占めていた。今となっては板東のどの桜樹と特定することはできないが、桜の名木であったに相違ない。板東かその近郊近在に、今もなお美しい花を咲かせていると思うと、心はひとりでに和んでくる。

なごむ心の鏡に写る人物は、前田利行さんだ。板東俘虜

収容所があった大正時代に徳島市に居住し歯科医院を開業、貧しい人は治療代無料とした仁愛の歯科医師だ。収容所長の武士道の体現者である松江豊壽大佐に、捕虜たちのための無報酬診療を申し出て、その治療にも当たった。

前田利行さんの名を不朽にしたのは、この行為ではない。その後、前田さんは岐阜市に転居することになったが、枯死寸前の岐阜県根尾村にある樹齢1400年以上と推定される桜の老木を救ったことにある。万物斉同、前田さんは、日本の園芸史上でだれも試みることのなかった桜の若木の根を老木の桜の根に接合させることによって、見事に蘇生させたのである。昭和41年9月、前田さんは94歳でこの世を去ったが、救った淡墨桜の巨木は残った。春ともなれば爛漫と咲き匂い、生命の畏敬を感じさせている。

この命代わるもなどか厭うまじ

三千歳までも生きよ淡墨

国の天然記念物に指定されている根尾村の桜木の傍らに、前田さんの上記の和歌が石碑に刻まれ、前田さんの桜愛の精神を伝えている。

年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず、クライさんとも、前田さんとも会うことは出来ない。異国の土地で見た桜の美の感動を終生持ち続けたクライさん、桜愛に生き、無償で捕虜たちの歯の治療に当たった前田さんの心は、時空を超えて今も板東の桜の花の中に宿っていると思うのは、思い過ごしであろうか。

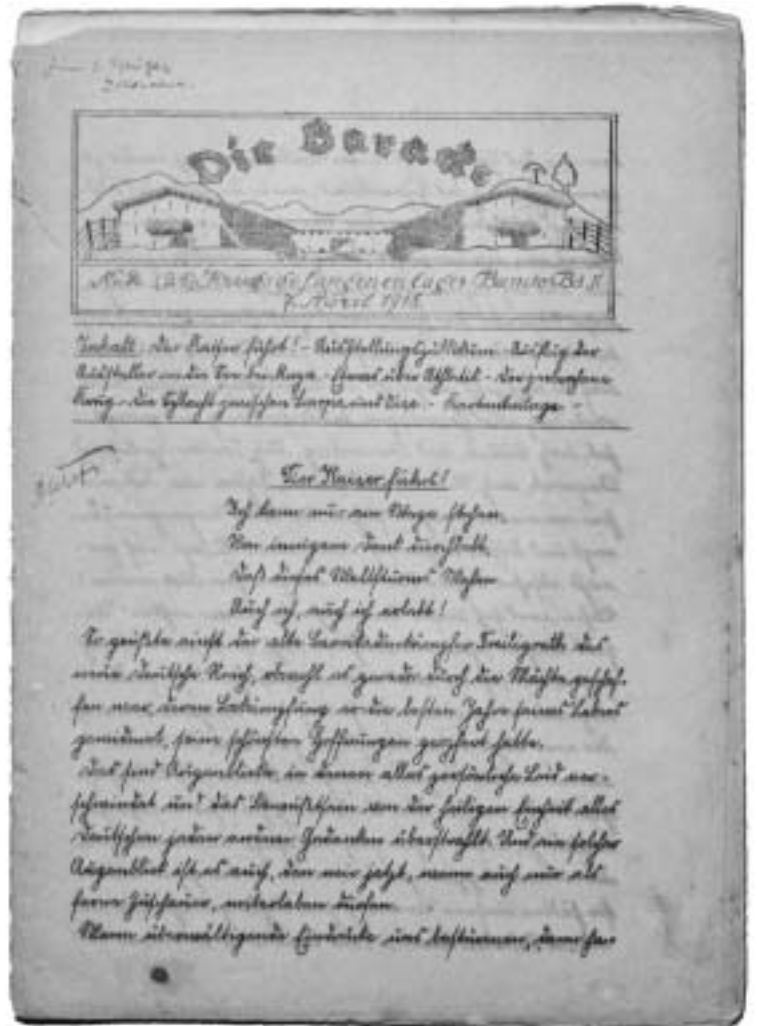


所蔵品紹介

今回紹介するのは、板東収容所で発行されていた週刊新聞『ディ・バラック』です。「ディ」は英語の the に当たる単語で、「バラック」とはドイツ語で平屋の（本格的な建築ではない）建物を指します。この場合には収容所の居住家屋のことを指しています。ちなみに日本語の「バラック」は、英語（あるいは仏語？）からの借用語です。

先ほど、この新聞を週刊と書きましたが、実際には最後の半年は月刊になっています。鳴門市ドイツ館はそのすべてを所蔵しています。すなわち、週刊で発行していたものを半年ごとに合本にしたものが第1巻から第3巻まで、そして1919（大正8）年の4月号から9月号までの月刊6冊です。これらはすべて常設展示されています。この新聞は古いドイツ語筆記体で書かれていますので、これらを通常のローマ字体に転記してパソコンで読めるようにしたCD-ROMと和訳4巻がドイツ館で発売されています。

その他に本来の刊行形態であった週刊の冊子を3冊所蔵していますが、こちらは展示されていませんので、ここに写真で紹介しましょう。上は1918年3月17日発行の第25号です。これはその時に開催されていたドイツ兵捕虜の美術工芸展覧会特集なので、表紙には会場のひとつ四国霊場一番札所の靈山寺（りょうぜんじ）が色刷りで描かれています。下は同年4月7日発行の第2巻第2号です。通常はこのような体裁で、1ページ目に大麻山を背景に兵舎を描いたタイトルが置かれています。なおこの新聞の寸法は、縦26.4cm、横19.3cmで、B5判より少しばかり大きいサイズです。



国際交流員の活動紹介

国際交流員アンヤ・ハンケルさんは、ドイツ館内外でさまざまな国際交流の仕事をしていますが、その中からインターネットで鳴門と徳島県についての記事を書いていますので、それを紹介します。残念ながらドイツ語の記事ですけど。

ひとつは鳴門市の姉妹都市リューネブルク市のホームページに掲載されているもので、Flaschenpost aus Naruto (鳴門からの瓶だより) というタイトルでこれまでに第5号まで執筆しています。そこでは鳴門を中心に体験した日本の祭りや習慣、行事、風物の紹介をしています。

Partnerschaften der Hansestadt Lüneburg

(<http://www.lueneburg.de/desktopdefault.aspx/tabid-140/>)

のページに Flaschenpost aus Naruto のリンクがあります。

もう一つは在ドイツ日本国大使館のドイツ語ホームペー

ジに Neues aus Japan という連載があるのですが、その第69号 (2010年8月) に鳴門と徳島県の紹介記事を書いています。URL は以下のとおりです。

http://www.de.emb-japan.go.jp/NaJ/NaJ1008/jet_schikoku.html



リューネブルク市のホームページから

寄 贈 品

ドイツ館では今年もさまざまな方面から、書籍類をはじめ、大正時代の写真やはがきなどを寄贈いただき、非常に感謝をしているところです。ここで、そのひとつを紹介いたします。

『俘虜生活二現ハレタル独逸国民性』大正7年2月俘虜情報局発行（本文73ページ、付表9ページ）。

これは、今年4月に愛媛県内子町の大村博さんから寄贈していただいたもので、当時の陸軍省で捕虜関係の統括を行っていた俘虜情報局発行の貴重な資料です。俘虜情報局日誌にはこの冊子を作成して、各方面に配布したことが記載されていますが、これまで実物が見つかっていなかったものです。内容は概略、各地に置かれていた収容所でのドイツ人の言動からその国民性を考察したものです。



8月までの主な行事と特別企画展

3月10日（水）～22日（月）

鳴門市内小学生による平和絵画展

3月21日（日） 第3回フリーダンスフェスト

4月4日（日） 「菩提樹の森」開園式

4月18日（日） ヴァイオリンと箏の調べ

4月27日（火）～5月15日（土） ドイツワインポスター展

5月29日（土）～6月27日（日）

前田博史写真展「森の気配」

6月1日（火）～15日（火） ベートーヴェン展

6月29日（火）～7月12日（月） ワールドカップ展

7月3日（土） 七タコンサート

7月27日（火）～8月9日（月）

ガラスの涼～徳島ガラススタジオ作品展～

8月11日（水）～22日（日） ドイツビールポスター展

8月22日（日） 「第九」フェスティバル in 板東

これからの行事予定

9月1日（水）～15日（水） ドイツ鉄道開通175周年展

9月12日（日） トリオアータム in 徳島 ～秋の演奏会～

9月18日（土）～30日（木） シュピーゲル写真展

10月1日（金）～17日（日） リューネブルク展

10月17日（日）

日独交流150周年 ヨーヨー・クリステンピアノコンサート

10月24日（日） 第17回ドイチェス・フェスト in なると

11月1日（月）～13日（土） 濱口芳春スケッチ画展

11月14日（日） RAKUGOXドイツ館 笑っちゃう会

12月1日（水）～12日（日） ドイツのクリスマス展

12月12日（日） 影あそび ジョイホナ公演

12月20日（月）～1月31日（月） 奥山実秋絵画展

（企画イベントにつきましては変更する場合がありますので、ご確認下さい。）

👁️ 編集後記

今回、板東に収容されていた捕虜お二人のその後にまつわる原稿をいただきました。ひとつは日本女性との間の遺児の消息が知れたことですが、喜ばしく思うと同時に、ご家族の複雑な心境を考えると、そっと見守るのが一番良いのかなと思います。一方、クライさんに板東へ望郷とも言えるほどの思いがあったことを改めて知った次第です。今、館長室にはその昔、彼から送られてきた民俗人形が飾られています。

